

# 日本英語学会第31回大会発表要旨

## 〈研究発表〉

第一室 (11月9日午後)

司会 菅原真理子 (同志社大学)

### 「韻律構造と有標性：音節とフットを中心として」

都田青子 (津田塾大学)

韻律構造の獲得過程を明らかにすることは、音声言語の発達とその障碍のみならず、読みの獲得過程とその障碍に関する知見を得る上でも重要である (Goswami (1993)など)。英語をはじめとした他言語の音韻発達に関する研究とは異なり、日本語のこれまでの研究は音節とモーラに着目したものが多く、それ以外の韻律レベル間の関係を取り上げたものはあまりない。

本発表では、小学1年生を対象に行った逆唱課題実験の結果を踏まえ、有標性の観点から音節とフットの関係を取り上げる。特にエラーに目を向けてみると、語内におけるフットの位置に加え、特殊モーラ間の階層的な下位分類 (窪菌 (1999) [1]、田中 (2008) [2]など) も考慮することでパターン化が可能となることを論じる。

[1] 「歌謡におけるモーラと音節」『文法と音声Ⅱ』 [2] 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』

### 「生成文法と最適性理論の融合性について—規則の簡潔性と傾向の観点から—」

西原哲雄 (宮城教育大学)

近年、音韻理論の中心的理論は主に、Prince & Smolensky (2004[1])などによって提唱された最適性理論という制約を基本概念とした理論であり、Chomsky & Halle (1968[2])によるSPE理論などに代表される規則に基づく生成音韻論とは異なるものとされている。この生成音韻論における1つの重要な概念が「簡潔性の尺度」であり、この簡潔性の尺度というものは、規則という概念を破棄し、違反可能

な制約という概念を導入した最適性理論においても、生成音韻論と同様に重要な概念である。

しかしながら、本発表では、この2つの理論での共通概念である簡潔性の尺度というものは、確かに重要な役割であることは事実であるが、唯一この概念のみが可能な文法の選択をさせているのではなく、「傾向」という概念も、考慮に入れる必要があり、これらの2つの概念の「融合 (妥協)」が最適性理論においても重要な役割をしていることを論証するものである。

[1] *Optimality Theory*, Blackwell [2] *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.

### 「濁りの表示と不透明性 (1)」

田中伸一 (東京大学)

本発表は日英語の有声音の性質の違いに注目し、提起される不透明性の問題が「濁りの表示」(Goldrick 2001)により解決されることを示す。一般に、*score*-[d]と*tor*-[ta]「取った」の違いを鑑みると、英語の同化は表層型(共鳴音の有声指定後)、日本語のそれは深層型(有声指定前)といえる。確かに日本語の鼻音も*inu-zini*「犬死に」では深層型(ライマンの法則から免除)だが、*sin*-[da]「死んだ」では表層型となり、パラドクスの問題が生じる。また英語が表層型なら、*plan*, *shrimp*, *sneeze*の共鳴音の無声化もパラドクスを生じる。同化が有声指定前なので、深層型を示唆するから(逆なら阻害音が有声化するはず)。「濁りの表示」では、こうした日英語の違いや、日英語のパラドクスの問題を一貫して説明できるばかりか、英語*sC*連鎖が\**sb*, \**sd*, \**sg*を許さないという配列制限も導かれる点を立証する。

第二室 (11月9日午後)

司会 丸田忠雄 (東京理科大学)

「the doctor from the football game 「一緒にサッカーをした医者」のような表現に現れる from について」

平沢慎也（東京大学大学院）

the doctor from the football game 「一緒にサッカーをした医者」や the Chinese food from last night 「昨晚食べた中華料理」等に現れる from についての発表である。形式的には、NP<sub>1</sub> from NP<sub>2</sub> で固定的な構文となっている（\*the doctor who is from the football game）。意味的には、まず NP<sub>2</sub> が出来事（ないし出来事の時・場）である点が重要である（I'm thinking of a girl from the piano performance/the Italian restaurant/last week./\*the piano/\*a red hat）。次に、NP<sub>2</sub> の想起する出来事と NP<sub>1</sub> の関係は文脈等により理解されうるものなら幅広く認められる（「一緒にプレーした」「食べた」等）。さらに、NP<sub>2</sub> と関わる出来事の時点は、NP<sub>1</sub> from NP<sub>2</sub> を含む主節の時点よりも相対的に過去である（The doctor from the football game told me yesterday that I might have cancer であれば、一緒にサッカーをした時点は昨日よりも前）。この NP<sub>1</sub> from NP<sub>2</sub> 構文と from の他の用法との関わりについても触れる予定である。

「目的語の省略について：Eat と Devour を中心に」

西脇幸太（岐阜県立岐阜北高等学校）

従来の研究では、eat という動詞は統語的な目的語を伴わない用法（目的語省略）が可能である一方で、eat と類似した意味を持つ devour は目的語省略が不可である、という観察が主流である（Celia ate/\*devoured. (Rice (1988 [1]))）。本発表では、eat と devour の目的語の省略可能性について論じ、devour は中核的には Rice の観察通りだが、レシピなどの周辺の文脈では目的語の省略が可能であること主張する。次に eat の目的語省略について議論する際には“省略”された目的語の定性を考慮する必要があり、他動詞 eat は devour と同様に限られた文脈でしか目的語省略を許さないことを示す(cf. Fillmore (1986[2])、西脇 (2011[3]))。以上を踏まえ、目的語の省略可能性の議論には中核と周辺という考え方を用い

ることが有効であることを提案する。

[1] “Unlikely Lexical Entries,” *BLS* 14. [2] “Pragmatically Controlled Zero Anaphora,” *BLS* 12. [3] 「動詞 Eat の Missing Object」『英語語法文法研究』第 18 号。

「類義語間の機能的差異—法副詞 maybe と perhaps を例にして—」

鈴木大介（日本学術振興会特別研究員）

本発表では、機能言語学の観点から、コーパスデータに対して複数の語用論的な情報の数量化を行うことで、法副詞の機能の相違を実証する。具体的には、maybe と perhaps という、意味や蓋然性の点で類似し、似通った生起環境で用いられている二者を扱う。大規模コーパスを用いて、各表現の実際のパターンを示し、語用論的な機能に着目した定量的な分析を行うことで、それらの差異を明確にする。まず、モダリティを強める機能（モーダル機能）に着目し、節における法助動詞との共起情報を数量化する。次に、法副詞の談話レベルでの振る舞い（談話機能）に焦点を当て、法副詞の生起位置を調査する。最後に、話し手と聞き手のやりとり（会話/発話行為の機能）に注目し、法副詞が生起する節の主語の定性を調べ、各代名詞との共起パターンを考察する。結果として、意味論レベルでは同様でも、節を超えた談話・語用論レベルにおいては表現間の機能に相違が見られた。

[1] Swan, Toril (1988) *Sentence Adverbials in English: A Synchronic and Diachronic Investigation*, Novus, Oslo.

第三室（11月9日午後）

司会 新沼史和（盛岡大学）

“Irish [+Q] COMPs”

Dónall P. Ó Baoill (Queen’s University Belfast, Professor Emeritus) and Hideki Maki (Gifu University)

This paper investigates the wh-construction in Irish, and points out that Irish is typologically unique in the sense that it has two different types

of [+Q] COMPs: one type of [+Q] COMP has a [strong] feature that needs to be deleted in overt syntax, which necessarily involves overt wh-movement; and another type that does not have this feature, and binds a wh-phrase in situ, so that no wh-movement takes place with this COMP. If this is correct, Irish is different from (i) English, which has a [+Q] COMP with a [strong] feature, which is inserted only in overt syntax, (ii) French, which has a [+Q] COMP with a [strong] feature, which is inserted either in overt syntax or in LF, according to Bošković (2000 [1]), and (iii) Chinese, which seems to have a [+Q] COMP without a [strong] feature.

[1] Bošković, Željko (2000) "Sometimes in SpecCP, Sometimes In-Situ," *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 53-87, MIT Press, Cambridge, Mass.

### 「アイルランド方言の遊離数量詞と弱フェイズに関する考察」

大塚知昇 (九州大学大学院)

Chomsky (2008 [1])の素性継承に基づくフェイズ理論の枠組みは、近年その妥当性が様々な先行研究で支持されつつある。しかし本発表では、McCloskey (2000 [2])で指摘された、*Who did you want your mother all to meet at the party? / Who did you expect your mother all to meet at the party?* のような、アイルランド方言の ECM 構文における遊離数量詞の例が、現在のこの枠組みでは説明できないことを示す。次に、Chomsky (2001 [3])が想定した弱フェイズが、現在あまり注目されていないものの、特定の現象の説明の上では、その想定が不可欠であることを示し、弱フェイズが存在すると主張する。そして、素性継承の枠組みは、現状のままでは、この弱フェイズの性質に関して、問題が生じることに触れ、その性質と上記の問題点の間の並行性を指摘し、強フェイズ主要部から弱フェイズ主要部への拡張された素性継承を提案することで、これらの問題の説明を試みる。

[1] "On Phases." [2] "Quantifier Float and Wh-Movement in an Irish English," *LI* 31. [3]

"Derivation by Phase."

### “Conditions on Object Quantifier Raising in English”

Shigeki Taguchi (Shinshu University)

This paper presents a novel account of the phase-boundedness of Object Quantifier Raising (OQR; i.e. QR motivated by type-resolution) in English, in terms of Configurational Distinctness. Specifically, I put forth a condition that requires every step of OQR to result in a syntactically distinct configuration throughout its derivational history, in tandem with the slightly modified version of Scope Economy, which requires that the final landing site of QR be the closest phase necessary for type-resolution and a new interpretation. I support Takahashi's (2011 [1]) claim that QR is phase-bounded (cf. Miyagawa 2011 [2]), but point out that his analysis, based on the assumption that phases are contextually determined by Case-valuation, is faced with empirical problems. I demonstrate that the combination of the abovementioned conditions accounts for the (un)availability of cross-clausal inverse scope reading in *that*-clauses and ECM infinitives in English.

[1] *Some Theoretical Consequences of Case-Marking in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Connecticut. [2] "Optionality." *The Oxford Handbook of Linguistic Minimalism*. Cedrix Boeckx ed. Oxford University Press, Oxford, 354-376.

第四室 (11月9日午後)

司会 松本マスミ (大阪教育大学)

### 「日本語主格目的語構文に関する一考察」

藤森千博 (弘前大学 (非常勤))

本発表では、日本語の主格目的語構文について、Takano (2003)が提案する埋込み VP 内に PRO を仮定した構造では Nomura (2003)などで指摘された主格目的語数量詞が主節動詞 (can) より狭い作用域を取る事実を説明できないことを指摘し、PRO は A 移動の痕跡とす

る Hornstein (1999)などが主張する提案で Takano の提案する構造を再構築することで、Tada (1992)らが主張する主格目的語が埋め込み VP 内から主節内へ移動するとした分析を採用する。さらに主格目的語の移動の動機として Bošković (2007, 2011)が提案する goal-driven movement を用いてその派生を捉える。その際、phase を越える移動とそうでない移動との間に見られる差異について Ochi (2009)で論じられている equi-distance を基に、non-phase が valuer となる移動には equi-disatance が適用され、下位指定部の要素が上位指定部の要素を越えて移動することができる」と論じる。

同時に、Koizumi (2008)で議論されている scope preference について、Pica and Snyder (1993)や Martin and Uriagereka (1998)による派生の過程における c-統御関係を読み取ることで統語的に説明できると論じる。

[1] “On the locality and motivation of Move and Agree,” *LI* 38. [2] “Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis Analysis,” *NLLT* 21. [3] “Overt object shift in Japanese,” *Syntax* 12.

### 「英語における「多重 XP 左方転位」構文の統語的派生について」

山内 昇 (名古屋大学大学院)

本発表では、Initiative, self-reliance, maturity — these are the qualities we’re looking for. (Huddleston and Pullum (2002: 1751) [1]) というような、複数の要素が文頭に生起して、独立節が後続する文を「多重 XP 左方転位」構文と呼び、その統語的派生を考察する。Her parents, they seem pretty uncaring. (*ibid.*: 1408) というような、一つの構成素が文頭に転位する通常の「左方転位」構文の派生に関しては、「変形規則による派生」(Ross (1967) [2]) と「基底生成による派生」(Rodman (1974) [3]) という 2 つの派生方法が提案されている。しかし、「多重 XP 左方転位」構文の特性を詳細に検討すると、どちらの派生方法も適用することができないということが分かる。本発表では、代案として「多重 XP 左方転位」構文は、構成素を成さない断片 (fragment) の連

鎖が後続する独立節と統合 (integrate) して派生すると主張する。

[1] *The Cambridge Grammar of the English Language*. [2] *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation. [3] “On Left Dislocation,” *Papers in Linguistics* 7, 437-466.

### 「同族目的語構文と格の意味解釈における機能について」

平崎永里子 (関西学院大学大学院)

本発表は、格素性が意味解釈に貢献する理論体系が必要であると主張し、その妥当性を同族目的語の分析を通じて論証する。極小主義理論において、格素性は[-interpretable]であると見做されており、故に格が意味解釈に関与出来ない理論体系となっている。しかし、実際の言語を精察すると、格の種類によって telicity に差が出る現象 (cf. Kratzer 2004[1]) 等、格が意味解釈に影響を与えていると仮定する事によってのみ説明が可能となる現象が散見される事から、格と意味解釈が結び付いた現象の存在を予測出来ない現行の理論は記述的妥当性が不十分であるといえる。本発表では、Chomsky(1995)[2]以降仮定されている形態に関する格素性とは独立に、意味概念に関する格素性が存在すると提案する事で前述の不備を補い、英語の同族目的語構文の分析を通じて提案の妥当性を検証する。本論では更に、本提案によって同族目的語構文と他動詞文の区別と振る舞いの差異についても統一的な説明を与えられる事も示す。

[1] “Telicity and the Meaning of Objective Case,” in Guéron, Jacqueline, and Jacqueline Lecarme (eds.) *The Syntax of Time*, MIT Press. [2] *The Minimalist Program*. MIT Press.

第五室 (11月9日午後)

司会 本多 啓 (神戸市外国語大学)

### 「共同注意から見た言語現象：if 分裂文と場所句倒置文」

志澤 剛 (目白大学)

本発表の考察対象は、英語の if 分裂文 (例：If anyone can help us, it is John.)、及び場所句倒

置文(例: Back to the village came the tax collector.)である。if 分裂文に関する志澤(2010 [1])の考察や、Bresnan (1994 [2])をはじめとする場所句倒置文の考察から、両構文には、①それぞれ、一般の条件文や非倒置文に比べて、様々な文法的制約が存在する、②「提示」の談話機能を果たす、③読み手/聞き手を語り手/話し手と概念的に一体化させる修辞効果を持つ、という点で並行性を認めることができる。本発表では、両構文の並行性が「共同注意(的関わり)」(cf. 本多(2011 [3]))という視点から統一的に扱うことができることを示す。本発表の主張は以下の2点である。①if 分裂文と場所句倒置文の機能的、修辭的な並行性は、両構文が「共同注意的関わり」に対応する表現構造であることから導かれる。②両構文に意味的に内在する変項の存在が共同注意を成立させる契機となる。

[1]「if 分裂文 (*if*-Clefts) の談話機能」『英語語法文法研究』第 17 号、[2]“Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar,” *Language* 70、[3]「共同注意と間主観性」澤田治美(編)『主観性と主体性』

### 「前置詞 *against* の多義について」

辻 早代加(大阪市立大学大学院)

前置詞の分析が広く行われてきた認知言語学においても、前置詞 *against* の多義は未だに十分な分析がなされているとは言えない。本発表は、とりわけ、*against* が持つ、一見例外的に感じられる「～を背景にして」という意味がどのように生じているのかに焦点を当て、*against* の多義構造を解明することを目的とする。

従来、前置詞の多義分析では、Lakoff (1987[1])らによる前置詞 *over* の分析におけるように、ほぼ純粋にトラジェクターとランドマークの形状や位置関係によってその説明がなされていた。しかし、*against* の場合は、他の前置詞のようにそういった幾何学的な要素のみではその多義を説明することはできず、トラジェクターとランドマーク間にさまざまな形で生じている「力」を考慮に入れなければならない。つまり広義での *force dynamics* に基づいて行うことで初めて説明が可能にな

る。

[1] *Women, Fire, and Dangerous Things: What categories reveal about the mind.* Chicago: University of Chicago Press.

### 「英語の中間態再考：事態概念と言語習得の観点から」

谷口一美(京都大学)

本発表は中間態に焦点を当て、言語習得のデータに基づきその形式と機能を認知言語学的に再考する。能動態・受動態が統語的のヴォイスであるのに対し、中間態は「影響性」を核とする意味的のヴォイスであり、主格・対格型言語において“affected entity”を主語とするのヴォイスであるとされる(Arce-Arenales et al.(1994 [1])). 認知言語学の観点による中間態の類型的研究に Kemmer (1993 [2])があるが、英語への言及は限定的である。ロマンス系言語での再帰的接語のような中間態の明示的標識を持たない英語であっても、中間態的な事態解釈とそれを示す言語形式は存在し、非対格自動詞・*get* 受け身・中間構文といった複数の形式がそれに該当する。これらの形式が実際にどのような過程を経て獲得され、英語の中間態がどのようにして形成されるか、コーパス(CHILDES)に基づく調査から示す。

[1] “Active voice and middle diathesis: A cross-linguistic perspective,” in B. Fox and P. J. Hopper (eds). *Voice: Form and Function*, Benjamins. [2] *The Middle Voice*, Benjamins.

第六室(11月10日午前)

司会 土橋善仁(新潟大学)

### 「フェイズの意味的・概念的特性と進化的妥当性について」

吉田江依子(名古屋工業大学)

Hauser, Chomsky, and Fitch (2002 [1]) は人間言語を FLN と FLB に分け、回帰のみが唯一人間言語に固有の特性であると主張した。この主張は UG に固有の部分を最小化した点で、言語進化の研究にとって有意義なものとなっているが、その一方で、これまで UG として提案されてきた多くの言語システムをどのよ

うにとらえなおすすめが重要な課題となる。

本発表はその一つの試みとして、派生の単位となっているフェイズをとりあげる。従来フェイズは特定の統語範疇によって規定されているが、統語範疇は言語固有の特性であるため、進化的妥当性(藤田(2009 [2]))を満たすことは難しい。加えて従来の統語範疇に基づく分析にはいくつかの経験的問題がある。本発表では、統語範疇に基づくフェイズ分析の問題点を指摘し、フェイズには統語範疇を超えた意味的・概念的な共通特性があることを主張する。そしてこの特性が人の認知システムと結びつくのではないかと示唆する。

[1] “The faculty of language: what is it, who has it, and how did it evolve?” *Science* 298, 1569-1579.

[2] 「言語の起源と進化: 生成文法の視点から」『言語と進化・変化』95-133.

### 「統語的必異性とフェイズ主要部」

戸塚将(東北大学大学院)

Richards (2010 [1])の必異性(Distinctness)は統語対象物が統語部門から音韻部門へと転送する際に働く制約であり、具体的には、転送境界内で同じラベルを持つ節点が構造上近接することを禁じる制約である。これにより、両部門の相互作用を探究している。本発表では、この必異性による定形関係節の問題点を挙げ、その分析を修正することを試みる。具体的には、定形関係節を構成する機能投射のTop、Rel、Forceがフェイズ主要部を形成することを提案する。本提案により、必異性の反例だけでなく、元々の例も説明できることを示し、統語部門に対して働く必異性の制約の存在を支持することを論じる。併せて、Rizzi (1997 [2])が提案する分離CP仮説とChomsky (2000 [3])以降が提案するフェイズ・モデルの統合を試みる。

[1] *Uttering Trees*, MIT Press. [2] “The Fine Structure of the Left Periphery” [3] “Minimalist Inquiries”

司会 島 越郎(東北大学)

### 「循環的線状化とWh島の制約」

佐藤英志(新潟県立大学)

Wh島の制約(WhIC)は一般に欠如要素在

制約(DIC)に包括される派生的制約と仮定されている。本発表では、これに対して、WhICがPFにおける循環的線状化の原理(CL)に還元される表示的制約であることを論じる。Agreeは位相不可侵条件(PIC)に従わず(つまりPICは破棄可能であり)、Spell-Out領域にアクセス可能である(Bošković (2007 [1]))と仮定すれば、連続循環的移動を伴わない派生(WhICはその一例)はCL違反として排除される。この仮説には以下のような利点がある。1)Sluicingによる島の修復に関して、Bošković (2011 [2])のような改ざん禁止条件に抵触する手段が不要である。2)WhICと優位性条件の対比(Boeckx and Lasnik (2006 [3]))が自然に説明できる。3)A移動(Super-raising)にも適用可能であり、結果的に(PICに加えて)DICを破棄する可能性が導かれる。このように本発表の仮説は計算の効率性の観点から支持される。

[1] “Agree, Phases, and Intervention Effects,” *LA* 33. [2] “Rescue by PF Deletion, Traces as (Non)interveners, and the *That*-Trace Effect,” *LI* 42. [3] “Intervention and Repair,” *LI* 37.

### 「非対格動詞句の派生における位相の有無についての一考察: 日本語からの肯定的証拠とその含意」

内芝慎也(無所属)

「位相(phase)」は、派生の循環を規制するだけでなく、言語機構に関わる他の諸特性を捉える上で非常に重要な役割を果たしているが、この理論的装置に関して様々な問題が未解決のまま残されている。その代表的なものとして、位相の定義付けの問題がある。何を位相として見做すのかについて、未だ研究者の間で意見の一致が見られず、例えば非対格動詞句を位相として見做すかどうかについて見解が分かれている(Chomsky 2000 vs. Legate 2003)。本発表では、非対格動詞句の派生において位相が存在することを示す証拠を日本語から提示することによって、上記の問題に一石を投じてみたい。

[1] Chomsky, N. 2000. “Minimalist inquiries: the framework,” in *Step by Step*. [2] Legate, J. A. 2003. “Some interface properties of the phase,” *LI*

### 「長距離認可現象とフェイズ理論」

西村 恵 (福岡大学)

本発表の目的は、Chomsky (2008 [1])で提案されたフェイズ理論に基づく新たなメカニズムを提案し、節境界を越えた長距離認可現象に対する派生分析を提示することである。フェイズ理論では、一旦インターフェイスへ Transfer された内部領域は以降の統語操作の対象にすることはできない。従って、この考えのもとでは、I do not think that anyone attended the party.において、統語派生が主節まで進んだ段階では従属節中の anyone は既に Transfer されており、not によりどのように認可されるのかという問題が生じる。本発表は、anyone のような被認可子は、派生中で意味的共有関係にある認可子により統語的に認可されるという前提のもとで、フェイズ主要部を中心としたメカニズムがその認可に関与することを主張する。この結果、節境界を越えた認可関係を要する各種事例の派生並びに文法特性が適切に説明されることを示す。

[1] Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, et al, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.

第七室 (11月10日午前)

司会 中西公子 (お茶の水女子大学)

### 「2つの un- と blocking 現象」

浜田啓志 (慶應義塾大学大学院)

英語の接頭辞 un- は、大きく2つの種類に区別されることが多い。unhappy, uneaten, unsmiling のように主に形容詞や現在・過去分詞につき、「否定」と結びつく un- (UN-1) と、undo, unload, untie など動詞を基体に取り、主に「逆」を表す un- (UN-2) である。本発表は、Oxford English Dictionary (OED) や Corpus of Contemporary American English (COCA) を用いた調査に基づき、両者がはらむ曖昧性の実態に迫ることを目的とする。unlocked や undoable のような表現は、構造的に UN-1 と

UN-2 その両方の解釈が可能であるということは Horn (1989 [1]) などで既に多く指摘されているものの、意味的な相関性や、どちらの解釈がより好まれるかについては十分に検討されてこなかった。本発表の調査結果からは、UN-1 一方の解釈のみが優先されるという、明確な傾向が見受けられる。たとえば、undoable の場合、undo+ -able という解釈は un- + doable という解釈に妨げられる。この観察から、UN-1 と UN-2 は同じ環境に位置づけられたとき homonymy blocking (ある表現がそれと同じ形式を持った別の表現の出現を阻止する現象) に参与するということを主張する。

[1] Horn, L. R. (1989) *A Natural History of Negation*. Stanford; Calif: CSLI.

### 「名詞修飾構造における形態統語間の競合について」

西牧和也 (筑波大学大学院)

本発表では、Ackema and Neeleman (2004[1]) が提案する統語論と形態論の競合理論を用い、日英語の名詞修飾構造を分析する。形容詞による名詞修飾で両言語は次の統語・形態の境界をまたぐ対照性を示す。(1) direct modification (d-m) の可能性：英語 (e.g. *small square table*) と異なり、日本語では不可とされる (Watanabe (2012 [2])). (2) A+N 複合の生産性：日本語 (e.g. あまざけ) と異なり、英語では非生産的である (Hüning (2008 [3])). 本発表では A と N の直接連結構造 (Baker (2003 [4])) を統語的に具現したものが d-m、形態的に具現したものが A+N 複合であるとみなし、英語では前者が後者を、日本語では後者が前者を、それぞれ阻止するがゆえに (1)(2)の対照性が生じると分析する。証拠として、日本語でも競合がない時は d-m が可能で、それが「Nの」形による名詞修飾 ([2]; e.g. チリの木の首飾り) であると論じる。

[1] *Beyond Morphology* [2] “Direct Modification in J” [3] “Adjective + Noun Constructions between Syntax and Word Form in D and G” [4] *Lexical Categories*

司会 小野 創 (近畿大学)

## 「後続子音による母音長の変化：幼児・成人の日本語コーパス分析と成人の英語学習データ」

北原真冬（早稲田大学）  
米山聖子（大東文化大学）

英語の母音が有声子音の前では無声子音の前よりも持続時間が長いことはよく知られている。成人の発話では、有声環境は無声環境に比べて約 1.5 倍の母音長をもたらす[1]。英語圏の乳幼児でも 2 歳の時点から同様の現象が見いだされる[2]。本研究では、この有声効果が言語普遍的現象であると同時に、言語個別の文法によって影響を受けることを明らかにした。まず日本人の幼児と成人の音声コーパスの分析を行ったところ、幼児の段階では英語と同様の有声効果が見られたが、成人になると調音点や調音法により、有声効果が部分的に抑制されることが分かった。次に、英語学習者の産出実験を行い、有声効果が第二言語発話においても現れることを確認した。また第二言語の習得が進むと、有声効果がより大きくなることも分かった。以上のことから、英語の音韻を学習することが既存の普遍的な有声効果を促進していると考えられる。

[1] House, A. S. (1961) “On Vowel Duration in English”, *JASA*, 33:1174-1178. [2] Ko, E-S.(2007) “Acquisition of Vowel Duration in Children Speaking American English”, *Proc. of Interspeech 2007*, 1881-1884.

## 「幼児英語における *Why not?* とその理論的含意」

杉崎鉦司（三重大学）

英語を母語として獲得中の幼児の 2 歳代頃の発話において、No Leila have a turn. のような、文頭に *no* が置かれた、誤った否定文が観察されることが広く知られている。Déprez & Pierce (1993 [1]) は、文頭にある *no* を文否定の要素（つまり *not* と同質の要素）であると考え、それに基づき、上記のような文では、主語が基底生成された動詞句内の位置に留まっていると主張している。本研究は、Merchant (2006 [2]) による *Why not?* という *wh* 疑問文の理論的分析を基に、英語を母語とする幼児の

自然発話における *Why not?* を詳細に分析する。その結果に基づき、幼児が *no* を *not* と同様に文否定を表す要素として用いているという提案にとって問題となる新たな事実を提示し、それにより、「文頭に *no* が現れている幼児の否定文においては主語が動詞句内に留まっている」という Déprez & Pierce (1993) の提案が妥当ではないことを主張する。

[1] “Negation and Functional Projections in Early Grammar” *LI* 24. [2] “Why No(t)?” *Style* 40.

## 「目的語の有生性がカクチケル・マヤ語の文処理負荷に与える影響について」

小泉政利（東北大学）

本発表では、カクチケル語（マヤ諸語）において、語順ならびに目的語の有生性が文理解時の処理負荷に与える影響を検討する。カクチケル語の統語的基本語順は「動詞・目的語・主語 (VOS)」であるが、SVO 語順もよく使われる。また、目的語が無生物の場合に比べて有生物の場合のほうが SVO の頻度が高いことが知られている [1]。

文正誤判断課題を用いた実験の結果、目的語の有生性に関わらず、SVO 語順よりも VOS 語順のほうが処理負荷が低いことが判明した。この結果は、カクチケル語の統語的基本語順を VOS とするマヤ言語学における伝統的な分析を支持する。また、目的語の有生性が文理解時の処理負荷に影響を与えないことを示唆する。さらに、「主語が目的語に先行する語順のほうがその逆の語順よりも処理負荷が低い」という先行研究の一般化 (=SO 語順選好) は普遍的なものではなく、個別言語の文法的な特性が文処理負荷に大きな影響を持つことが確認された。

[1] Kubo, T., Ono, H., Tanaka, M., Koizumi, M., & Sakai, H. (2012) “How does animacy affect word order in a VOS language?” Poster presented at the 25th Annual CUNY Conference on Human Sentence Processing.

第八室（11月10日午前）

司会 本多 啓（神戸市外国語大学）



## 「*just so you know* の談話機能と句源について」

野部 尊仁 (筑波大学大学院)

最近のアメリカ映画・テレビドラマによく *just so you know* という表現が観察される。この表現は比較的近年になって使用されるようになった口語表現である。そのためか、インターネット上にインフォーマルな記述があるものの、辞書・文法書にはまだほとんど記載がない。本発表では、この表現の形式を手がかりに、その句源に関する仮説を提案し、より精密な意味・機能の記述を試みる。具体的には、*just so you know* は、いわゆる *so that* 構文の目的を表す従属節から派生した表現であると主張する。よく知られるように、*because*, *although* などの接続詞には発話行為を修飾する用法があるが、*so that* 目的節にもこの現象が観察され、その一部が固定し、*just so you know* が現れたと考えられる。このように、*just so you know* が目的の意味を持ち、発話行為を修飾していると考えれば、ヘッジ機能や推意の存在をマークする機能など、この表現の機能的動機付けが明らかとなる。

## 「英語進行形構文の機能的連続性

### —主観性と間主観性からみた機能分化—

清水啓子 (熊本県立大学)

英語進行形構文は多様な意味・機能を持つが、認知文法 (Langacker 2008[1]など) の枠組みにおいては、その基本的な概念構造は、完了プロセスを未完了プロセスに変換することであるとされる。本発表では、進行形構文の様々な用法の中でも周辺的であり、意味の焦点がアスペクト的な意味 (未完了) から外れているように見えるいくつかの用法を考察の出発点とし、それらが進行形構文の概念構造 (imperfective) を基本的に保持しており、中心的用法 (進行中の動作) やその他の用法と家族的類似性を持つことを示す。特に、主観性と間主観性、行為の overtness 対 covertness、達成目標と手段的行為の関係 (Tomasello 1999[2])、(発話) 行為意図の理解、zooming-out、内的視点、メトニミー認知に基づく行為の (再) フレーム化 (intention-oriented、result-oriented) といった観点から、進行形構文の機能分化の説明を試みる。

[1] Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford U. Press.

[2] Tomasello, Michael (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard U. Press.

司会 高橋英光 (北海道大学)

## 「様態・結果の相補性」とその反例とされるものについての再検討

並木翔太郎 (筑波大学大学院)

Rappaport and Levin (RH&L) (2010) では、動詞の語彙化の制約に基づき、「様態と結果の意味は、同時に動詞に語彙化されることはない」とし、様態と結果の意味が相補関係にあることを説いた。これに対して、Beavers and Koontz-Garboden (B&KG) (2012) は殺害様態動詞 (guillotine など) や料理様態動詞 (braise など) が反例になると指摘している。本発表では、まず RH&L が定義した結果の概念 (scalar change) を存在論的概念範疇の観点から再考し修正を施す。その上で、いくつかの言語事実を提示し、B&KG のいう殺害様態動詞や料理様態動詞が、様態と結果の相補性の反例にはならないことを示す。反例と思われる事例に関しては、結果は語彙的に指定されているものではなく、あくまで語用論的に推論されることで得られる意味であると結論付けられる。

[1] “Manner and result in the roots of verbal meaning.” *Linguistic Inquiry* 43(3): 331-369.

## 「結果構文における創造性と生産性」

鈴木 亨 (山形大学)

いわゆる創造的な結果構文において非選択目的語が認可されるしくみを明らかにすることを通じて、結果構文の創造性と生産性について考察する。Boas(2003)に代表される用例基盤モデルの研究では、結果構文の生産性について否定的見解が示され、特に非選択目的語を伴う創造的事例については、構文としての一般化は事実上放棄されている。本発表では、非選択目的語を伴う結果構文の創造的事例を精査し、非選択目的語が認可されるしくみについて、構文の一般性を前提とした説明を試みる。先行する構文研究では、コーパス検索では見つけにくい創造的な結果構文を単発の逸脱事例と見なす傾向があるが、少なからず存在する関連事例が容易に解釈されうるという言語事実は、そのよ

うな事例に関しても、言語使用における創造性の基盤にある文法と意味解釈のインターフェイスを解明する手がかりとして、一般的な説明を求めることに理論的意義があることを論じる。

[1] *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI, Stanford.

### 「心理形容詞の意味と従える補文標識 that の有無との関連性」

土屋知洋 (防衛大学校)

補文標識 that の有無に関する研究は動詞が中心ではあるが、Bolinger (1972 [1]) をはじめ多くの研究者により論じられてきた。本発表の目的は、これまで焦点があてられてこなかった -ed 形の心理形容詞に絞り、各心理形容詞の意味が that の有無と密接に関係していることを意味的統語研究の立場から再考することである。影山 (2001 [2]) や八木 (1999 [3]) が指摘する各心理形容詞が従える統語形式から心理形容詞が「点的感情」と「持続的感情」という二つの意味に大別されることを示し、この各心理形容詞の有する意味の相違が that を従えるか否かという傾向に密接に関係していることをコーパスの量的調査から論じる。また、同一心理形容詞が that の有無をどのような要因で決定しているのかについてもコーパスから検索される実例を検討し実証的に論じ、「反芻的 (客観的) 判断」と「瞬時的判断・(主観的) 即断」という感情を抱く過程の違いに対応している傾向があることを新たに主張する。

[1] *That's that*. [2] 『日英対照 動詞の意味と構文』 [3] 『英語の語法と文法—意味からのアプローチ』

第九室 (11月10日午前)

司会 松本マスマ (大阪教育大学)

### 「日英語における受動文と使役文の統語分析」

萱嶋 崇 (九州大学大学院)

英語では、動詞 *have* を用い、形態的に全く同じ文で受動態と使役両方の意味を表すこと

ができる。このことから、本発表では *have* 受動文と *have* 使役文の構造はほぼ同じであり、受動態と使役の解釈の違いは派生における名詞句移動の違いから生まれると提案する。

具体的には、Grimshaw(1990[1])、Hale and Keyser(1993[2])らの議論を礎とし、受動態には機能投射 VoiceP が必要であると提案する。*have* 受動文と *have* 使役文はこの VoiceP をその派生に持ち、その指定部で名詞句に付与される素性[+ passive]がどの項に付与されるかによって受動態と使役の解釈が区別される。

また、英語の *have* 受動文と *have* 使役文に対する分析を日本語の受動文と使役文にも拡張することで、日英語間の受動文と使役文に関する相違が、一般的な言語的特徴から自然に説明されることを論じる。

[1] *Argument Structure*. [2] “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations.”

### 「勧誘行為交替の統語的分析」

梶本顕士 (東北大学)

移動様態動作主動詞 (gallop, jump, walk, 等) は、勧誘行為交替と呼ばれる自他交替 (The horse jumped over the fence./Sylvia jumped the horse over the fence.) を示す。前者は自動詞用法であり、後者はこれを使役化した他動詞用法である。他動詞への交替は自由に可能というわけではなく、一定の意味制限が課せられる。特に、他動詞の主語は単なる原因項では非文法的であり (\*The lightning jumped the horse over the fence.)、意図性を持つ動作主項でなければならない (Reinhart (2002 [1])). しかし本稿では、原因項であっても他動詞の主語になれるデータが存在することを示し (These magic shoes can jump you over rivers and houses.)、他動詞の主語に課せられる意味制限は、動詞語根が軽動詞へ主要部移動する統語派生から帰結すると提案する。また提案のさらなる帰結として、他動詞が示す cotemporaneity の意味特性 (Folli and Harley (2006 [2])) も説明できると論じる。

[1] “The Theta System: An Overview” [2] “On the Licensing of Causatives of Directed Motion: Waltzing Matilda All Over”

司会 柳 朋宏 (中部大学)

### 「補文選択と例外的格付与現象」

富澤直人 (山形大学)

本発表では、不定詞補文における例外的格付与現象を考察し、「例外的補文選択」の仕組みを提案するとともに、この仕組みを他の例外的な補文選択現象[1]の説明へ展開する。

wager/assure類の不定詞補文の主語は、A'移動のもとで例外的格付与が起ることがよく知られている: Who did John wager ~~who~~ to be crazy? [2][3]. この現象に対して、フェーズ理論[4]の枠組みに立脚し、次の「例外的な補文選択」の仕組みを提案する: [wager TP C] (語順は不問)。すなわち、wagerのTheme項は統語上CPとして具現するが、wagerの補部位置をCPそのものでなくCP内のTPが占めることにより、(1) wagerとTPから成るVPと、(2)そのTPとCから成るCPとが共に根rootとなる多根構造の存在を提案する。(1)が例外的格付与を可能にし、(2)がA'移動の共存を要求する。

[1] Adger & Quer (2001) *Language* 77, 107-133.

[2] Kayne (1984) *Connectedness*. [3] Bošković (1997) *Nonfinite complementation*. [4] Chomsky (2008) "On phases."

### 「中間投射の排出」

荒野章彦 (東北大学大学院)

現行のフェイズ理論では、フェイズ主要部の補部が、循環的に排出(Spell-Out)されると仮定されている。これに対し本発表では、Chomsky (2013 [1])の枠組みの下で、フェイズ主要部が「指定部・主要部一致」を行う際には、指定部を残し、フェイズ主要部の「中間投射」が排出されると提案し、この提案の妥当性を下記の現象から論じる。第一に、主節の左端に位置する話題要素や助動詞が消失する現象を、Rizzi (2005 [2])等に従い、排出の観点から分析する。第二に、単一の排出領域内に、同一範疇の要素が複数生起することを禁止する Distinctness Condition (Richards (2010 [3]))に基づいて、格抵抗原理(Case Resistance Principle)に説明を与える。第三に、削除現象を排出の一形態と仮定することにより、先行

研究で指摘されていた削除の一般化を捉えることが出来ることを示す。

[1] "Problems of Projection," *Lingua* 130. [2] "Phase Theory and the Privilege of the Root," *Organizing Grammar*, Mouton de Gruyter. [3] *Uttering Trees*, MIT Press.

### 「英語における縮約関係節の主要部繰り上げ分析」

戸澤隆広 (北見工業大学)

Hulsey and Sauerland (2006 [1])は関係節には Matching 分析と主要部繰り上げ分析の両方が有効であると主張している。また、統語的理由により、外置した関係節は Matching 分析のみが有効としている。そうすると、論理的可能性として主要部繰り上げ分析のみを有効とする関係節があると予測される。本発表では、それは縮約関係節であって、Bhatt (1999 [2])の分析の路線が正しいと主張する。縮約関係節は分詞-ing を主要部とする非定形の TP とする。縮約関係節の主語が TP を標的として移動し、投射する(Donati (2006 [3]))ことで縮約関係節が得られる。これに基づき、これまで注目されてこなかった関係節と縮約関係節の統語的振る舞いの違い、すなわち(1)束縛原理 C の効果の有無、(2)目的語の関係節化の可否、(3)関係節の外置の可否などの違いに説明を与える。

[1] "Sorting out Relative Clauses." [2] *Covert Modality in Non-Finite Contexts*. [3] "On Wh-Head Movement."

第十室 (11月10日午前)

司会 金澤俊吾 (高知県立大学)

### 「'time'-away 構文の多義ネットワーク」

山本恵子 (大阪大学大学院)

'time'-away 構文 (e.g. Fred drank the night away (Jackendoff (1997) [1])) は、「時間を無駄にする」という非合成的意味を表す。Jackendoff (1997) は、この構文を形式 [<sub>VP</sub> V NP away] に 'waste [<sub>Time</sub> NP] V-ing' という意味が結びついた一種の生産的イディオムとみなす。一方、高見 (2007) [2] は「無駄」とい

う含意がこの構文の十分条件ではないことを指摘し、意味的機能的制約を提案している。本発表ではコーパスの実例に基づき、どちらの主張がより妥当であるかを実証的に検証する。その結果、この構文は1つの意味では取まりきらない現象であり、プロトタイプを中心に多義ネットワークを成していることが判明する。同時に、両先行研究はいずれもこの構文の現象の一部しか捉えきれていないことも明らかとなる。

[1] Jackendoff, Ray (1997) "Twistin' the night away," *Language* 73, 534-559. [2] 高見健一 (2007) 「形式と意味のミスマッチ—Time away 構文を中心に—」, 『英語青年』, 11月号.

### 「Body Part Off 構文の継承関係」

工藤 俊 (筑波大学大学院)

近年の研究によって、その統語的・意味的特徴が明らかになってきた、いわゆる Body Part Off 構文 (e.g. He talked his head off.) は、強意解釈 (e.g. 「頭がとぶほど必死に」) を得るのがデフォルトである。そのため、先行研究においては、同様の解釈を得る非能格結果構文 (e.g. The joggers ran the pavement thin.) と、頻繁に比較検討されてきた (Jackendoff (1997) [1])。

しかし、Goldberg (1995 [2]) の提唱する構文文法に基づく分析の結果、Body Part Off 構文の構文的特徴は、結果構文のそれよりも、使役移動構文 (e.g. They laughed the poor guy out of the room.) の構文的特性を強く継承しているという、従来の研究とは異なる結論に至った。具体的には、「Body Part Off 構文は、結果構文に動機付けられた構文ではなく、使役移動構文から具体例継承とメタファー継承を経て継承された構文」であり、これを本発表の主張とする。

[1] "Twistin' the Night Away," *Language* 73, 534-559. [2] *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press.

司会 花崎美紀 (信州大学)

「心理的変化を表す使役移動構文における

### 一考察」

中尾朋子 (大阪大学大学院)

本発表では感情を表す名詞句を目的語とする心理的変化を表す使役移動構文 (例: The man struck *fear* into the heart of the enemy./ The scene struck *terror* into Mary.) を対象として、構文文法のアプローチ (Boas(2003)[1])により、その性質の考察を試みる。この構文では、方向を表す前置詞句に、感情の受け手となる「人」等を表す名詞句が生起する。また、主語は人である場合と無生物である場合がある。

まず、コーパスの実例を基に動詞 strike が生起する主語の種類と主語の示す意図性を考察し、主語は原因を表す場合と動作主の場合があることを指摘する。さらに、この構文のタイプに生起する動詞の種類を検討し、2種類のプロトタイプの構文の存在、及びこれら2種類の構文からの拡張あるいは融合と考えられる構文の存在を指摘する。

[1] *A Constructional Approach to Resultative*, CSLI Publications, Stanford.

### 「目的移動構文に関する構文文法的考察」

森下裕三 (神戸大学大学院)

本研究では、時制や人称によって屈折する直示的移動動詞 (e.g. "go" や "come") に目的を表す -ing 形の動詞 (e.g. *shopping*, *swimming*) が後続する She went shopping {at/\*to} the mall. のような構文について議論する。具体的な分析方法として、Goldberg (1995[1]) による項構造に基づく構文文法の枠組みから分析を試みる。Goldberg による構文文法は動詞以外に構文にも項構造を積極的に認めるという立場を取るため、動詞の項構造を重視する理論とは対照をなす。

しかし、構文の項構造を決めるのが動詞なのか構文なのかという問題について独立した証拠を挙げなければ、理論的に妥当な議論とは言えない。本研究では Quine (1960[2]) らの分析を応用し、目的移動構文が経路の項を取ることが出来ない理由および主語とアスペクトに関する制約は、動詞ではなく構文全体の性質から導き出せると主張する。

[1] Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument*

structure. [2] Quine, Williard Van Orman (1960) *Word and Object*.

「動詞 walk と着点句の意味論」

出水孝典 (神戸学院大学)

本発表では、Levin と Rappaport Hovav (1999 [1]) (以下 L、RH とそれぞれ略) の提唱してきた事象構造鋳型による分析が、Talmy(2000 [2])による移動動詞の類型論に対してもつ意味を考察する。論点は(i)Talmy の類型論は、衛星枠付け vs. 動詞枠付けという二項対立ではなく、動詞枠付けの表現はすべての言語に存在する表現形式で、衛星枠付けの表現は、Talmy が衛星枠付け言語だと主張してきた言語のみに見られる有標的なものである、(ii)L と RH が主張する事象の同一認定は、衛星枠付けの表現を取れる一部の言語のみに存在する仕組みである、(iii)事象の同一認定は、移動の経路という主事象の、様態という従属事象に対する枠付けを、具体的な仕組みとして一般化したものである、の3点である。なお、主張の根拠として、複数の英米小説に見られる walk、その日本語・フランス語・ドイツ語・中国語訳における対応箇所を資料として用いる。

[1] “Two Structures for Compositionally Derived Events” [2] *Toward a Cognitive Semantics* Vol. II.

第十一室 (11月10日午前)

司会 村田和代 (龍谷大学)

### “Answers to Japanese Multi-unit Questions with Explicit Assumptions”

Masanobu Masuda (Koshien University)

Multi-unit questions (MUQs), questions delivered together with other question(s) or statement(s), are employed in complex communicative projects, but have little been provided with systematic analysis. The present paper analyzes MUQ-answer sequences in Japanese interview dialogues with conversation analytic methods. The paper limits its scope of analysis to the sequences that include MUQs with explicit assumptions of questioners, and describes

(1) how answers are designed while responding to each unit in MUQs and (2) how question recipients resist assumptions stated explicitly in MUQs.

As to (1), various answer design is described, including the newly discovered “incorporated” one, in which response to the questioner’s assumption does not constitute a separate unit. As to (2), the practice of resistance like “transformative answers” (Stivers and Hayashi 2010), which has little been studied on MUQ-answer sequences, is examined.

[1] Linell, P. et al. (2003) “MUQs in institutional interactions.” *Text*, 23 (4). [2] Stivers, T. and Hayashi, M. (2010) “Transformative answers.” *Lang. in Soc.*, 39.

### 「定冠詞の一意性理論に対する例外」

北村 久 (北海道大学専門研究員)

定冠詞の一意性理論は Russell (1905[1])に由来する。本研究は、Birner and Ward (1994[2])の議論に焦点を当てて、批判的に検討して代替案を提示する。本研究は三人の話者に当該の例文を判定してもらい、その結果、三つの異なる方言を確認した。従って、本研究は、以下の現象について三種類の方言を検討する。定冠詞がそれを伴う単数名詞句に対応する対象が複数ある状況で使われている発話出来事を考える。そのとき、ある方言では、単数名詞句の定冠詞は、それが結び付く述語が文脈上十分に予測可能であるときかつそのときに限り使われる。これは定冠詞の総称用法の現れであり、定冠詞の一意性理論の反例ではないことを指摘する。別の方言では、同じ状況で、定冠詞の一意性理論と整合的であることを指摘する。また、同じ状況で振る舞うもう一つの方言は、定冠詞の一意性理論の反例または定冠詞の総称用法の理論の例外であることを主張する。

[1] “On denoting,” *Mind* 14, 479-493. [2] “Uniqueness, Familiarity, and the Definite Article in English,” *BLS* 20, 93-102

司会 新沼史和 (盛岡大学)

「形容詞由来名詞と動詞の形態論的考察」

森田千草（青山学院大学（非常勤））

日本語の形容詞を名詞化する接辞-mi は、-sa や-me に比べて非常に限られた形容詞のみが付着する。本発表ではまず、接辞-mi が「点・場所」を意味する名詞を派生する場合、「高さ」や「深さ」を表す寸法形容詞にのみ付着することを示す。また、形容詞を動詞化する接辞-mar-と-me-も、寸法形容詞を中心とした限られた意味クラスの形容詞にのみ付着することを示し、名詞化接辞-mi と動詞化接辞-mar-と-me-が極めて類似した選択制限を持つことを提示する。ここで、これらの接辞がいずれも/m/を含むことから、/m/が単独の形態素であり、名詞化接辞は-i、動詞化接辞は-ar-と-e-であることを提案する。さらに、形容詞から派生した状態変化動詞の内部構造には比較の要素が存在するという Bobaljik (2012[1])の分析に基づき、形態素-mは比較に関わる機能範疇の主要部が顕在化したものであると主張する。この分析は、日本語の比較の主要部が比較構文においても非顕在的に存在するという主張を支持することになる。

[1] Bobaljik, J. D. (2012) *Universals in Comparative Morphology*, MIT Press.

### 「分散形態論における虚辞要素としての Linking Element」

大久保龍寛（筑波大学大学院）

Linking element (LE) (例 : park-s department, psych-o-path, など)のような実質的意味を持たない形態素の存在は分散形態論 (Embick and Marantz (2008)[1])をはじめとする形態素基盤のアプローチにとって問題とされてきた。本発表では、分散形態論の枠組みにおける Mukai (2008)[2]の分析を出発点とし、新たに LE を虚辞要素と認めることでこの問題を解決し、LE の文法内への位置づけが可能となることを示す。さらに、語根や語幹のような小型の非主要部を持つ複合語に生じる LE (psych-o-path)と語形のような大型の非主要部を持つ複合語に生じる LE (park-s department)という二種類の LE を区別すべきことやそれが Okubo (2013)[3]で提案されている内部領域と外部領域という二種類の語形成領域の違いに還元されることを示す。

[1] “Architecture and Blocking” *LI* 39 [2] “Recursive Compounds” *Word Structure* 1 [3] “The PE within the Word and the Relationship between Morphology and Syntax” *JELS* 30.

## 〈シンポジウム〉

A 室 (11月9日午後)

### 「英語シノニムと辞書記述」

司会 井上永幸（広島大学）

辞書におけるシノニム記述の目的は、母語話者向けの辞書と EFL/ESL 向けの辞書では異なっている。母語話者向けの辞書では、すぐに思い出せないシノニムを確認したり、母語話者にとって難解な表現や紛らわしい表現の区別を明確化することが主な目的となる。一方、EFL/ESL 向けの辞書では、母語話者のような言語直観をもたず当該言語の使用経験も少ないユーザーが対象となるため、日常生活に必要な基本語を含むシノニムの使い分けを知ることが主な目的となる。そのため、シノニム間の意味的・統語的な相違はもちろん、母語の干渉による誤用の可能性を考慮したシノニム記述が必要となる。以上のような目的を果たすためには、どのような情報が必要であろうか。コーパスを活用した辞書が当たり前となってきて、英語シノニムに関する情報もかなり質が上がってきた。辞書におけるシノニム記述の現状と将来について議論する。

### 「どのような方法で記述するか」

講師 田中 実（関西学院大学）

シノニムを記述する際の方法として、われわれが半ば無意識のうちに打ち立てていると思われる、いわば理論的支柱と言っているような、いくつかの項目を取り上げて、具体的な例を提示しながら話をすすめていきたい。項目としては、〈意味特性をつかむ〉、〈比較を試みる〉(田中 (1998) [1])、〈対称軸をつかむ〉、〈適切な例文の提示〉(Dixon (1991) [2])の4つを考えている。話に入る前に、シノニムの弁別の難しさの6つの要因をも指摘しておきたい。その要因とは、知的意味 (cognitive meaning) のずれ、喚情的意味 (affective

meaning) のずれ、連語関係 (collocation) のずれ、統語的振舞いのずれ、方言的なずれ、文体的なずれ、の6つである。それらの「ずれ」を認識しながら、シノニム同士の微妙なニュアンスの違いを把握する際の方法を各項目のもとで見ていきたい。

[1] 『英語シノニム比較辞典』。[2] *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*.

### 「どのようなシノニムの どのような情報が必要か」

講師 友繁義典 (兵庫県立大学)

辞書では語レベルと句レベルのシノニムに関する情報が重要である。シノニム関係にあるペア (あるいは3つ以上) の語に関して、connotations の違い (+evaluative あるいは -evaluative な判断など)、scale (「規模」「程度」「度合い) の違い、register (使用域) の違いなどに関する情報以外に、各語の典型的な「核」となる意味・用法の記載の必要性を述べる。また、シノニム関係にあるペア (あるいは3つ以上) の語がそれぞれどのような場面でどのように適切に使い分けられるかという語用論的な情報の必要性も指摘したい。さらに、シノニム関係にある語が、他のどのような語とコロケーションを形成しているかに関する情報の重要性を見た後、シノニム関係にある副詞句や動詞句に関して、英和辞典では取り扱われていないがその記載が必要であると思われる情報について考えてみたい。

[1] Cruse, A. *Lexical Semantics*. [2] Cruse, A. *Meaning in Language*.

### 「どのように情報を得るか」

講師 梅咲敦子 (関西学院大学)

シノニムの実証的研究方法として、母語話者へのアンケート等による聞き取り調査と、実際の用例にあたる方法が考えられる。普通両者は併用するが、コンピュータコーパスと検索手段の発達とともに、後者が主要な情報源となってきた。本発表では、コーパス検索が、シノニム研究に必要な情報を必要な方法に基づきどのように提供できるかを例示し、シノニム記述改善に如何に貢献できるかを考

えたい。年代・地域・社会階層・使用域による相違情報は、主として (サブ) コーパスにおける使用頻度の差から得られる。しかし、意味の差は、共起語や構文の差、個々の用例を比較して判断することになる。動詞の類義語の本質的相違を主語、目的語、副詞類、補文構造情報から見いだす例、さらに、文脈情報にみるシノニムの使い分け、句レベルの例などを取り上げたい。

[1] Biber, D. & R. Reppen (eds.) *Corpus Linguistics*, Vol. 1, SAGE.

### 「シノニム記述の実態と改善案」

講師 井上永幸 (広島大学)

日本の英語辞書におけるシノニム記述は、従来から英米の参考書、特にシノニム・語法辞典や EFL/ESL 辞典のシノニム欄に負うところが多い。その結果、どの辞書のシノニム記述も似通ったものになったり、英米の参考書に記述がなければ、日本の英語辞書にも記述がないといった状況が生じてしまう。また、英米の参考書で扱われているシノニム情報が必ずしも日本人英語学習者の求めるものとは限らない。シノニム間の重なる意味や独自の意味、含意、語用論的・文化的意味、頻出する文脈の情報などに留まらず、典型的な構文・コロケーションはもちろん、ユーザーの母語による干渉を考慮に入れた情報なども必要であろう。コーパスにより、非母語話者ならではのシノニム分析も可能になってきた。本発表では、日本人英語学習者が必要とするシノニムに関する情報を、どのようにして示してゆくことができるのか、その可能性について具体例を示しながら考察してゆく。

B 室 (11 月 10 日午後)

### 「語彙意味論の新たな可能性を探る」

司会 由本陽子 (大阪大学)

語彙意味論は、1980 年代の生成文法理論における「投射原理」を踏まえ、項の具現形式の大部分は動詞の意味から予測可能であるという前提のもと、述語の意味のうち文法的現象に関わる (grammatically relevant) 成分を抽出し、適格な統語構造と規則的に対応するよう

な語彙意味の記述を探索してきた(cf. Levin & Rappaport Hovav 2005)。Levin (1985)から 30 年近くを経、生成語彙論をはじめとする新たな理論展開によって百科事典的知識の形式化も可能となった今、改めて原点に立ち戻って語彙意味論の進むべき道を考えるべき時期に来ている。本シンポジウムでは、各講師から、生成語彙論による動詞意味論、形容詞の語彙意味論、心理言語学との接点について最新の研究成果を発表頂き、さらに統語論の専門家からのコメントも頂戴して、語彙意味論の今後進むべき道と新たな可能性を探りたい。

[1] Levin, B. 1985. *Lexical Semantics in Review: an Introduction. Lexicon Project Working Papers 1.*  
[2] Levin, B. & M. Rappaport Hovav. 2005. *Argument Realization.* Cambridge U.

### 「様態・結果相補性の仮説と合成性」

講師 小野尚之 (東北大学)

事象を表す動詞が様態・結果動詞のいずれかに分類され、単一の動詞が両方の性質をもつことはないとする仮説(様態・結果の相補性)(Rappaport Hovav & Levin 1998 [1])が最近論争の的になっている。語彙意味論的な手法によってこの仮説の妥当性を検証する研究がある一方で(Beavers & Koontz-Garboden 2012 [2])、統語論的なアプローチによる代案も提示されている(Mateu & Acedo-Matellán 2012 [3])。本発表は、この問題についての論点を整理した上で、この仮説をめぐる議論の根底に慣例的な合成原理の考え方があることを明らかにする。この見方では“root”に含まれる情報が意味合成に参与しないため様態・結果の相補性が生じる。これに対し、生成語彙論(Generative Lexicon)の考え方にに基づき、共合成の原理によって様態・結果の相補性を捉え直す試みを提示する。

[1] “Building Verb Meanings” [2] “Manner and Result in the Roots of Verbal Meaning” [3] “The Manner/Result Complementarity Revisited: A Syntactic Approach”

### 「評価形容詞の語彙意味論を巡って」

講師 丸田忠雄 (東京理科大学)

Wise, kind などの評価形容詞は典型的に以

下の構文交替を示す。

- (1) a. Alex was wise to roll the hose back onto the dock.  
b. It was wise of Alex to roll the hose back onto the dock.

本発表はこの交替を、当該形容詞の語彙意味論(「態」の性質も含む)から取組み、動詞以外の語彙意味論の可能性を示す。まずWilkinson (1970)の以下の例に着目する。

- (2) Alex did wisely to roll the hose back onto the dock.

W によれば(2)は(1a)と‘similar’な意味になるという。(1b)に対応する(3)は現代英語では稀であるが、コーパスを調べるとこの型は近代英語ではよく用いられていたようだ。

- (3) ?It was wisely done of Alex to roll the hose back onto the dock. (native に確認)

(2)と(3)の交替は「態」の交替を想起させる。この分析を(1a, b)の分析に応用する。具体的には(1b)の前置詞 of は動作主のマーカーと捉える。フランス語の対応構文(4)における交替について提案されている同趣旨の分析(Paykin et al. 2010)が本説を支持することも示す。

- (4) a. Tu fais sagement de refuser de répondre.  
b. C’est sagement fait à toi de refuser de répondre.

[1] Paykin et al. 2010. “When être ‘to be’ is Agentive.” LAGB Annual Meeting 2010. [2] Wilkinson, R. 1970. “Factive Complements and Action Complements.” *CLS* 6:425-444.

### 「心理言語学の方法と語彙意味論」

講師 中谷健太郎 (甲南大学)

統語処理に関する実験研究が活発に行われているに比べ、語の意味と統語判断のインタフェース研究である語彙意味論の実験研究は多いとはいええない。その主な理由は、条件統制の難しさに加え、因子設定と反応予測を同じ「語」に対して行わざるをえないという実験計画上の特性にもある。しかし、たとえそのような実験計画であっても内省では捉えられない差異や処理上の特性が検出されることがある。本発表では自己ペース読文課題や質問紙調査などの具体的な手法を紹介すると



もに、語彙意味論の実験研究の可能性を探る。また、一部の語彙意味論のモデル[1]では従来百科事典的知識とされた意味もレキシコンに取り込まれているが、語用論的推論と言語的含意の境界はどこにあるのか、質問紙調査から見えることを検討する。それにともない、語彙分解アプローチの潜在的問題点を議論する。

[1] Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. MIT Press.

C室 (11月10日午後)

### 「形態的一致現象と格現象との関連：比較統語論的観点からの再考」

司会 浦 啓之 (関西学院大学)

2000年以降のミニマリスト統語論においては、agreementという概念が理論内的deviceとして非常に重要な役割を果たしている。しかし、元来 agreement とは2つの統語的に離れた要素間の形態論的变化の符合関係を表すものであるが、そのような agreement の本来的側面に係る言語データの緻密な分析を通して理論に貢献しようとするような論考は意外に少ないのが現状である。

本シンポジウムでは、世界の多様な言語の格と一致現象の詳細な分析を通して、様々な格・一致現象の実際の分析を呈出することで参加者に経験的データの提供をおこない、その分析の理論的帰結を示唆することで理論内における agreement の意味合いの再考を促すことを目標とする。このようなやり方で、経験的データの分析から理論を構築していく様の一例を示し、閉塞感のあるミニマリスト統語論の発展への寄与を目指したい。

### 「DPの分解と Case/Agreement」

講師 平岩 健 (明治学院大学)

人間言語には Case (格) が形態的に具現化される日本語タイプの言語もあれば、形態的には一切具現化されない言語 (Bantu 諸語や中国語) もある。日本語タイプの言語では Case が機能範疇 (CaseP) として存在するか否かは重要な問題の一つであるが、一方で一見すると名詞のように見えるにも関わらず NPI

要素や一部の量化詞、数量詞のように Case-marking (格標示) が現れないかもしくは随意的な要素が存在する。本発表では、日本語の Case-marking と Bantu 諸語の Agreement (一致) 現象との比較対照研究により、Case の分布と構造的な位置付けを考察し、その普遍性を明らかにする。

また従来、多くの Bantu 諸語や Gur 諸語において Agreement を担う名詞クラスシステム (noun class system) は日本語タイプの言語では存在しないか不活性であると考えられてきた。本発表では、上記研究の一つの帰結として、DP (特に不定語や代名詞) の内部構造を分解することにより、日本語にも同一の機能範疇が存在していることを明らかにする。

### 「格≠一致? : Disagreement between Case and Agreement」

講師 浦 啓之 (関西学院大学)

ergative system における格の振る舞いは、1990年代後半からのミニマリスト格理論の発展により大いに解明が進んできた ([1] 所収の諸論文参照)。しかし、ergative system を示す節内で顕れる一致 (agreement) の振る舞いについては未だ謎が多い。

最も困難なのは、格形態として absolutive を顕す DP が、その節の adicity の違いに依存して SUBJ-agreement でも OBJ-agreement でも誘引し得るし、GFsubject を有し SUBJ-agreement を誘引している DP が、その節の相 (Aspect) の違いに依存して2つの相異なる格形態 (ergative と nominative) を顕し得る、という現象である。これは一見、格を agreement の基に subsume する理論に背反するように見えるが、果たしてそうか?

本論では、主にグルジア語などの分析を通して、格と一致を理論内でどこまで同じに扱うべきか、そうでない場合にはどのような理論を考案すべきか、という問題を考える。

[1] Jonas, D., et al. (eds.) 2006. *Ergativity*. Springer.

### 「DPの内と外」

講師 渡辺 明 (東京大学)

一致は、通常、素性の値を決定することを

動機として行われると今世紀に入ってからのミニマリストプログラムでは考えられているが、DP の内部では必ずしもそうでない場合にも一致（とそれに付随する移動）が生じることを数にまつわる日本語や現代ヘブライ語などの現象をもとに論じる。日本語でいえば、「一部のリンゴ」や「リンゴの一部」といった表現の構造と意味解釈の問題である。日本語では数の一致などももちろん直接観察することはできないのだが、それがわかりやすい形で反映されている現代ヘブライ語と合わせて見ることで、両者共通のメカニズムをあぶり出すことを試みる。現代ヘブライ語については、二系統の素性を用いる Danon (2013 [1]) の分析を廃し、通常の一系統の素性だけで事足りることを示す。

[1] “Agreement alternations with quantified nominals in Modern Hebrew,” *Journal of Linguistics* 49.

D 室 (11 月 10 日午後)

「ヴォイスの対照研究はどこまで進んだのか、そしてどこに向かうのか  
—研究史の再評価と今後の展望にむけて—  
司会 西村義樹 (東京大学)

本シンポジウムでは、日英語対照研究の現状と今後の課題について、特にヴォイスをめぐる諸問題を中心に多角的な考察を試みる。

鷲尾講師は、これまで包括的な取り扱いを受けて来なかった日本文法研究の歴史を再構成しつつ、日欧語対照研究におけるその現代的な意義について論じる。

西村講師は認知文法の観点から、「意味構造の個別言語固有性」、「語彙と文法の連続性」、「用法基盤モデル」、「好まれる言い廻し」、「英語らしさ、日本語らしさ」などに基づいた、日英語対照研究の枠組みを提示する。

本多講師は、英語の中間構文と日本語の可能表現をとりあげ、「可能の意味が生じるメカニズム」「プロトタイプカテゴリーとしての動作主」に言及しつつ、ヴォイスの限界領域をさぐる。

「対照言語学の近代と現代」

講師 鷲尾龍一 (学習院大学)

近代における日本文法論の幕開けは、日欧語対照研究の幕開けでもあった (文献 [1]: 第3章)。大槻文彦『廣日本文典』、山田孝雄『日本文法論』などが代表的なものであるが、これらはヴォイスに関する優れた対照研究の書でもあり、とりわけ前者は、なぜ《ヴォイス》の概念がしばしば混乱してきたのか、その理由を考える上で有益な出発点となる (文献 [1]: 第4章)。現代の生成文法や認知言語学における主要な論点のいくつかも、近代にその系譜を見出すことができる。例えば「同一理論」と「非同理論」の対立、使役をめぐる日英語の組織的な違い、受動文の様々な分類 (文献 [2] [3])、日本語受動文の他動詞文起源説 (文献 [4]) など。こうした事実は、我々が依然として過去から多くを学べることを示すと共に、現代の文法研究が何を明らかにしてきたのか、そして次世代の研究に何が期待できるのかを考えるための重要な手掛かりを与えてくれる。

[1] 齊木美知世・鷲尾龍一『日本文法の系譜学』開拓社、[2] 同『日本語研究の近代と現代』未刊行、[3] 齊木「松下文法と被动表現の分類」『論叢 現代文化・公共政策』7、[4] 鷲尾「受動表現の類型と起源」『日本語文法』5。

「日英語のヴォイス現象：認知文法の視点」

講師 西村義樹 (東京大学)

1. 「意味構造は (すべての言語に共通ではなく) 個々の言語に固有である」という認知文法の主張の実質が何であるのかを日本語と英語の使役及び受身の表現の分析を通して例示する。

2. 日英語の使役と受身の表現の適切な分析にとって、「語彙 (的知識) と文法 (的知識) は形式と意味の慣習的な組み合わせを単位とする連続体を構成する」という認知文法の考え方が有効であることを示す。

3. 2 と関連して、日英語の使役と受身の適切な分析のためには、言語の知識に関する用法基盤 (usage-based) モデルが必要であることを示す。

4. 日本語と英語の使役と受身の表現から

(2 であげた考え方を先取りしていたと考えられる) B. L. Whorf の“fashions of speaking”を例示すると思われる例を抽出し、「日本語／英語らしい表現」とは何かを考察する。

### 「中間構文の英日対照とその理論的な意義」

講師 本多 啓 (神戸市外国語大学)

本発表ではまず、英語の中間構文について「プロトタイプカテゴリーである」という見方(文献[1][2])を徹底させながら見直す。具体的には、典型的な中間構文と多くの性質を共有しながらも能動受動というヴォイス的な枠組みでは捉えられない事例を検討し、また「中間構文の意味構造には動作主が存在する」と「動作主はプロトタイプカテゴリーである」を組み合わせることでその帰結を論じる。英語の中間構文に意味上対応すると考えられる日本語表現としては可能表現を検討する。全体としては、中間構文という概念の批判的な再検討と、中間構文をヴォイス現象として研究することの意義の再検討を求めるものとなる。

[1]Yoshimura and Taylor (2004) “What Makes a Good Middle?” *English Language and Linguistics* 8 [2]Taylor and Yoshimura (2006) “The Middle Construction as a Prototype Category” 『日本認知言語学会論文集』6 [3]西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」 『構文と事象構造』研究社 [4] 西村義樹・野矢茂樹 (2012) 『言語学の教室』中公新書

E室 (11月10日午後)

### 「接続現象—対照研究から みえてくるもの—」

西光義弘 (神戸大学名誉教授)

日本人学習者および日本人の英語教師も、英語を書いたり話したりする場合、接続表現を過度に使う傾向があり、英語母語話者に訂正されることがよくある。日本語学習者の日本語の談話においても、接続に関して問題が生じることが少なくない。本シンポジウムでは、日本語と英語の接続表現の特質を、特に談話構造、認知構造、情報構造、などの観点から解明することを目指すものである。接続

表現として接続詞自体以外の現象も文および節を接続手段をすべて含むことを前提として考える。

### 「「城崎にて」の原文と英訳8種による接続 表現の日英対照研究」

講師 西光義弘 (神戸大学名誉教授)

「城崎にて」の原文は日本語特有の談話の流れがかなり極端な形になって話が展開している。Kaplan(1966)が提唱した対照語用論をさらに精密化したものを提示し、英語話者5名と日本人3名の英訳をデータに取り、特に英語の談話構造で収められない談話方略をどこまでとらえることができるかという観点で観察する。特に言いたいことをほめかすだけで、はっきり言っていない部分をどう処理するか、また話がどんどんそれて行く部分をどう処理するか、矛盾するような感情を同時に持ち合わせているという記述はともすれば、英訳することが難しいといった問題がある。Kaplan, Robert B. (1966) “Cultural thought patterns in inter-cultural education.” *Language Learning* 16.1-2, 1-20.

### 「日本映画英語字幕訳コーパスにみる

#### 英語のセツゾク・日本語のセツゾク」

講師 井上逸兵 (慶應義塾大学)

翻訳にはオリジナルとの「ズレ」がつきものだが、日本映画の英語字幕訳には特有の「ズレ方」がある。一画面あたりの文字数と時間という物理的な制約があるため、いわば「文化的なつじつまあわせ」の訳(「文化意識(culturally coherent translation)」)がしばしば見られる。しかし、一見すると苦し紛れの訳や誤訳にすら思われるような訳にも、その根底には英語圏・日本、英語・日本語それぞれのコミュニケーションの文化の原理が働いている。本発表では、この「ズレ」を活用し、社会言語学、語用論、談話分析的側面に特化した日本映画英語字幕訳コーパスを通して、英語・日本語それぞれに見られる発話と発話のセツゾク (coherence)、人と人とのセツゾク (involvement) を論じてみたい。また、この種のコーパスにおけるアノテーションの問題にもふれて、その理論的枠組みと相互行為

の社会言語学、対照談話分析のありうる展開についても考えたい。

### 「ゼロ接続としての文脈」

講師 鍋島弘治朗 (関西大学)

本発表では Recanati (2004[2], 2007[3], 2012[4]) の文脈主義に基づき、文と文の接続が展開する談話の中で、累加的に定まっていく過程を思弁的に考察する。

まず、単語の意味は基本的に未決定的であり、前後の文脈の中で定まることを見る。次に、接続詞のない文と文の併置の解釈が、時間的推移、全体部分など、いくつかの定型的解釈テンプレートを持つことを主張する。最後に、語の喚起する、いわばデフォルト文脈とでも呼ぶべき<フレーム> (Fillmore and Atkins, 1992[1])が、複数の語や文を合目的的に統括する可能性に関して検討する。

[1]“Toward a frame-based lexicon” in Lehrer et al. (eds.) *Frame, fields, and contrasts*. Lawrence Erlbaum. [2] *Literal meaning*. Cambridge UP. [3] *Perspectival thought*. Oxford UP. [4] “Compositionality, flexibility, and context-dependence” in Werning et al. (eds.) *The Oxford Handbook of Compositionality*. Oxford UP.

### 「日本語の独話における接続詞「で」の機能」

講師 石黒 圭 (一橋大学)

話し手が独話 (モノログ) で原稿などを見ないで長く話しつづけられるのはなぜか。

そこには、もちろん、指示詞やフィラーの働きもあるだろう。しかし、独話を詳しく観察していくと、それらにくわえて、独話専用とも言えるような接続詞がそれぞれの言語に存在し、そうした接続詞を活用して一貫した長い話を作りあげているように思われる。

本発表では、そうした一貫性を作りだす日本語の接続詞「で」に注目し、それが談話産出中にどのような機能を果たしているかを、出現頻度、先行・後続文脈、フィラーや他の接続詞との共起など、その出現環境を調べることをとおして明らかにしたい。また、日本語母語話者との比較のなかで、日本語学習者が「で」をどのように習得していくかについても考察する。さらに時間が許せば、ほかの

言語で、日本語の「で」相当の役割を果たしている接続詞を取りあげ、「で」との対照についても論じたいと考えている。

[1] 石黒圭(2010)『文章は接続詞で決まる』光文社新書 [2] 石黒圭(2012)『講義の談話の接続表現』佐久間まゆみ編著『講義の談話の表現と理解』くろしお出版

